

第3章 教科等の指導

1 学習指導の基本事項

(1) 学習指導の意義

学習指導は学校での教育活動の中心であり、学習指導を確実に行うことは教師の大切な任務である。

学習指導は、児童生徒の成長を保障するものでなければならない。生きる力を育むことを目指し基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力、人間性等を涵養することが大切である。

そのために、指導計画・指導方法・評価などの工夫改善に努め、効果的な指導を行う必要がある。

さらに、個に応じた指導や基礎的・基本的な事項を確実に身に付けさせる指導、言語活動等を充実させる指導等を工夫するとともに、楽しく主体的な取組が行われるように心がけたい。

グローバル化・情報化・高齢化・少子化などの社会の変化に対応した学習を展開するようにしたい。

(2) 個に応じた指導

児童生徒を中心に据えた学習指導を進めようとするときに、まず児童生徒の実態把握が大切である。

学校には、生活環境の異なる様々な児童生徒がいる。この事実から学習指導は出発しなくてはならない。個性や能力によって学習の在り方は変わっていくものであるが、かつては一斉指導による画一化された授業が多く行われてきた。自ら学び、自ら考える力など、生きる力を育成するためには、そのような授業では不十分であり、児童生徒が授業内容を確実に身に付けることができるよう、一人一人

を大切にしたいきめ細かな指導をしていくことが必要である。

具体的には、学習の習熟の程度に応じた指導、興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習など個に応じた指導の工夫をしていくことを心がけ、授業展開していくことである。

(3) 楽しく分かりやすい授業

学習指導では、児童生徒が学習内容を分かることが何よりも大切であり、授業中に学ぶことの楽しさや成就感を味わうことができるようにさせることが重要な課題である。

児童生徒が「～が分かった」「～ができるようになった」という成就感を味わうことで、態度や意欲などの情意面を育てることができ、さらには、認知面についての学習効果も期待できる。

以下、分かりやすい授業にするための留意点を挙げる。

- ア 学習のねらいや課題を明確にする。
- イ 見通しをもって取り組める学習活動を取り入れる。
- ウ 自分の意見や考えを構築するための時間を確保する。
- エ 自分の考えを発表したり、説明したりする等、各教科等の特性を生かした言語活動を適切に位置付けるとともに、児童生徒同士が学び合う場面を設ける。
- オ 学習内容を振り返り、理解を深めるための時間を確保し、学習のまとめを自分の言葉で書かせることを習慣化する。

(4) 基礎的・基本的な知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成

各教科では、基礎的・基本的な知識及び技能を習得しつつ、観察や実験等を通して、その結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で、知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識及び技

能の活用を図る学習活動を行う必要がある。さらにその内容を総合的な学習の時間を中心に行われている教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動へと発展させることが重要である。これらの学習活動は相互に関連し合っており、はっきりと分類できるものではない。

また、教科の学習活動や総合的な学習の時間を中心とした探究活動を通して、相乗的に思考力、判断力、表現力等が育まれるなど、実際の学習の過程としては、決して一つの方向で進むだけではないことに留意する必要がある。

(5) 学習意欲の向上や学習習慣の確立

個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の充実により分かる喜びを実感することが大切である。また、観察・実験やレポートの作成、論述などの体験的な学習や知識及び技能の活用を図る学習活動、職業や自己の将来に関する学習などを通して学ぶ意義を認識し、学習意欲を高めることが求められている。また、小・中学校を通じ、学習習慣を確立することは極めて重要であり、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課すなど家庭学習も視野に入れた指導を行う必要がある。

2 学習指導計画の作成

(1) 指導計画の意義

教育は、意図的・計画的な営みである。各学校においては、国の定める教育の目的・目標を基盤としながら、現代社会の要請、地域や学校、児童生徒の実態を考慮して学校の教育目標を設定する。さらに、この目的・目標を達成するため国の基準に基づき、教育課程、いわゆる教育計画を編成する。

教育計画は、各教科等の関連を図りながら、教育の目的・目標を達成するための方策を総合的に示した全体計画でなければならない。この全体計画に基づいて、各教科等では単元、教材、主題やねらい、必要な指導時数を考慮して、年間指導計画、学期ごと、月ごと、週ごとの指導計画が立案され、最終的には、1単位時間の学習計画(学習指導案)にまで具現化させなければならない。

(2) 指導計画作成上の留意点

指導計画作成の基本的な考え方としては、学習指導要領を基準にすると同時に、地域や学校及び児童生徒の実態などを十分に考慮し、創意工夫を生かして作成する。

- ア 人間性豊かな児童生徒の育成を図る計画である。
- イ 基礎的・基本的な内容が確実に身に付けられる計画である。
- ウ 教師や学校の創意工夫を生かした計画である。
- エ 弾力的な計画である。
- オ 評価の方法を明確に定め、評価を計画的に位置付けたものである。
- カ 学習指導要領解説総則編に示されている「指導計画の作成に当たって配慮すべき事項」を踏まえた計画である。

(3) 単元計画

学習指導に当たっては、単元計画を立てる必要がある。単元計画では、次のようなことを考慮する。

- ア 指導目標を定め、児童生徒が身に付く力の見通しをもてるように学習内容を選択、配列する。
- イ 指導に要する総時間数や配列された学習内容ごとの指導時間数を決める。
- ウ 指導目標を達成するために最も有効な学習活動や学習形態を考える。
- エ 学習内容に応じた教具や資料を考え

る。
オ 評価規準と評価方法及び判断の基準を考える。

(4) 1 単位時間の計画

学習指導案は、教科内容としての単元やその指導計画に基づいた時間ごとの目標を決め、その目標を効果的に達成させるために、児童生徒にどんな学習活動をさせ、どのような成果を期待するのか、などの授業の展開を構想したものである。学習指導案には、本時のねらい、児童生徒の興味・関心や問題意識を押さえた上で、学習指導過程を明記する。学習指導過程には、指導内容や学習活動、指導上の留意点、資料の準備、評価などを組み込む。学習指導案を作成するときに配慮すべき事項として、次のような点が挙げられる。

- ア 年間指導計画の目標、内容等を具体化するための教材研究を十分に作る。
- イ 児童生徒の実態を的確に把握する。
- ウ 児童生徒の反応に即し、展開に弾力性をもたせる。
- エ 活動のねらいを明確にするとともに、練り上げる場を設定する。
- オ 教師が行う指導・支援について、その方法や手だてを明記する。

3 教材研究の進め方

授業は、教材を使用し、教師と児童生徒、あるいは児童生徒同士が、各教科の特質に応じた見方・考え方を使って、自ら知識や考え方、そして学ぶ態度を身に付けていく。そうした意味において教材は、児童生徒の成長や発達に直接かかわるものである。したがって、すべての教科や領域の指導において、教師は常に児童生徒に最適な教材を提供できるよう研究し準備しなくてはならない。

教材研究は、教師の仕事の中核になるものである。ここでは、児童生徒の思考や行動を予想しながら自分自身の創意工夫を発揮すること

が大切である。しかし、思いつきで独走することは避けたい。同僚教師との相談や、学年会や教科部会での十分な検討が必要である。

教材研究を進めるに当たってのポイントは、次の3点である。

(1) 目標分析と指導内容

単元や題材の指導で、何をねらいとして指導するのかを明らかにすることが目標分析である。目標の分析では、単元や題材全体の目標に沿って、1 単位時間ごとの指導目標まで具体化する。そうすることによって指導内容が具体的に見えてくる。目標分析は、次のような視点で行うことが望ましい。

- ア 学習指導要領に示されている内容を分析し、「何を、どこまで、どのくらい学習させるのか」を具体的に把握する。
- イ 教科書や各種資料をよく読み、教師自身、指導内容のイメージ化を図り、図表等にまとめてみる。

(2) 児童生徒の実態把握

目標分析によって導き出された指導内容に関して、児童生徒の実態を理解しなければならない。そのために、次の3点に留意する必要がある。

- ア 前学年あるいは前時まで、「何を、どの程度学習してきたのか」を把握し、つまずきは何かを把握する。
- イ 個々の児童生徒の知識、技能、思考及び情意的な側面を押さえる。
- ウ 児童生徒はどのような事実や現象に興味・関心をもっているかを調べる。

(3) 素材の教材化における留意点

児童生徒の実態を踏まえ、幅の広い視野から最適な素材を見付け、以下の点に留意しながら教材化できるようにしたい。

- ア この素材は児童生徒の興味・関心をひく教材になり得るか。
- イ 素材の魅力を児童生徒の学習の何に

役立てることができるか。

ウ 目標と結び付け、教材の要素としての価値があるものであるか。

エ その素材は中心教材に位置付けるのか、補助的教材として扱うのか。

オ 教材構成において、系統的なまとまりがあるものとなるのか。

4 学習指導案の作成

学習指導案は、授業の設計図ともいえる。一般的には1単位時間の、学級を対象とする学習指導の計画をいう。このうち、詳しく記された計画を細案や精案といい、簡略化された計画を略案という。

(1) 学習指導案の意味と役割

ア 学習指導案の意味

毎日の教育実践は年間指導計画に基づき、月計画や週計画が立てられ進められる。しかし、これらの計画がそのまま直接毎日の授業につながるわけではない。学習指導案は、その計画をより具体化して実践に移すための指導計画案である。

日常の授業実施のためには、略案、細案の差は別として、なんらかの指導計画案がなければ指導を進められない。

イ 学習指導案の役割

学習指導案は、授業展開の中でも教師の指針となるものであるが、そのほかに、次の2点においても重要な役割を果たす。

第一には授業前の段階である。授業は教師の考え方や理解の仕方に左右されることが大きい。したがって授業の前に学年会や教科部会で同僚教師をまじえて単元観、教材観、児童生徒観などを話し合い、足場をしっかりと固めておくことが必要である。

また、指導の順序、学習問題の設定、発問、資料、教具などをどうするか考え

ることも必要である。これらを学習指導案という形にまとめることにより、自分自身でも指導の過程を明確にすることができる。

第二には授業後の段階である。ここでは指導案と実際の授業とのずれを回視しなければならない。その回視は授業中の児童生徒の活動や発言をもとにして教材に限ることなく、教師の学習に対する考え方や児童生徒観など根本的なことがらをも含んで行いたい。そして、回視されたことが次の学習指導に生かされる形で終わることが何よりも大切になる。

以上に述べた役割を果たすためには、まず教師の主体性がなくてはならない。児童生徒の成長を願い、自分の指導力の向上を目指して指導案は作成されるのである。いずれにしても、教師のその授業に込めた自分の願いを分かりやすくはっきりと書くことが必要であり、ねらい及びその実現のための手立て、評価基準と観点や方法を具体的に書かなければ役に立ちにくい。

(2) 学習指導案作成の手順と方法

学習指導案はこのように書くべきだというきまりはないが、一般的には以下のような手順と方法が考えられる。

ア 題材を決める。

年間指導計画や教科書、学習指導要領及び解説等を参考にして題材を決める。このとき、教科等横断的な視点や学年間の系統も考慮する。

イ 児童生徒の実態をとらえる。

既習経験や前提となる知識及び技能等を的確にとらえる。事前調査・レディネステスト・意識調査等、また、日頃の児童生徒の観察等をよりどころにする。

ウ 教材を研究する。

素材の特性や系統性を明らかにする。教科書は最も基本的な教材であるが、他

の教材や活用方法を参考にしたり、先行研究にも当たったりしたい。ここでの研究が浅いと、深まりや広がりのある授業にはなりにくい。

エ 目標を決める。

学習指導要領をもとに、児童生徒の実態を考慮して単元で身に付けたい資質・能力を示す。

本時の目標については、観点別や一文で示すとよい。また、本時の目標は1～2つとしたい。

オ 指導の流れをつくる。

どのような内容をどのような順序で指導したらよいか一連の流れを考える。

児童生徒の立場になって流れを構成したり、児童生徒の反応を予想したりして、複数の流れを考えておくことが重要である。児童生徒のつまずきや個に応じるには単線的な流れでは無理である。

児童生徒の立場に立つとき時間配分に注意が必要である。特に、思考や活動、そして話し合いの時間を十分とることが大切である。

カ 主な発問や資料などを準備する。

(ア) 児童生徒の反応を予想し、それに応じた教師の手立て(発問・助言)を考えておく。

(イ) いつ、どこで、どんな形の資料を、どのように提示するかを考えておく。

(ウ) ICTを活用した学習場面や学習形態を考えておく(一斉・小集団・個別等)。

(エ) 板書計画を立てておく。

一般的な形で述べてきたが、必ずしもこの順序どおりに学習指導案ができ上がるものではない。児童生徒の抱える問題を何とかしたい、この素材はきっと児童生徒の役に立つに違いない、といった授業者の思いから始まることも考えられる。また、手順と方法ア～カへと順序よく流れず、行ったり来たりすることも多い。要は、目標と児童生徒の実態をで

きるだけ明確にとらえ、それを、いかに教材と関係付けて筋の通った流れにしていくかが大切なのである。

児童生徒が授業を通して学習意欲が向上するなどより良く変容できるよう展開を工夫することが求められる。

(3) 学習指導案に書かれる項目(例)

この項目は各学校によって異なっている。一般的には以下のように考えられる。

(細案)

- ① 単元名(題材、主題)
- ② 単元について
 - ・単元の価値、授業者の教材観、児童生徒の実態、指導上の留意事項、単元の系統等が述べられる。
- ③ 目標(観点別等で書く。)
- ④ 評価規準など
- ⑤ 指導計画(学習のまとまりと時間配分及び本時の位置・評価計画を書く。)
- ⑥ 本時の指導
 - ・本時の目標(目標の観点別等も書く。)
 - ・本時の展開(指導過程、評価を書く。)学校や教科、また、研究の重点の置き方によって、展開欄の項目は異なっている。
 - ・評価

一人一人に基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うために、学習指導案の果たす役割は大きい。積極的に学習指導案を作成して授業に取り組みたい。特に、個に応じた指導の充実を期して、複数の学習指導案を用意することが望まれる。

5 学習指導の実際

どのような学習指導を展開したら、「分かる授業」が展開できて、授業で児童生徒を変えることができるのか、そのためには、どのような工夫が学習指導に必要なのかを考えてみる。

(1) 学習問題（学習課題）

授業者にとっての最初のポイントは学習のねらいを達成するために、その時間の学習問題（学習課題）をどう決定するかである。

望ましい学習問題（学習課題）の条件

- *具体的な事実をもとにしたものであること。
- *児童生徒にとって本当に取り組みたいと思う学習問題（学習課題）であること。
- *手を伸ばせば届くという難しさをもつ内容であること。
- *児童生徒が学習の手立てや見通しをもち、主体的に解決に向かって活動できるものであること。
- *学習中に一人一人の個性が活かされる学習問題（学習課題）であること。

そして、学習問題（学習課題）は次のような型が考えられる。

A 思考を促す学習の場合の学習問題（学習課題）の型

「なぜ（どうして）だろうか。」型

B 作品を作ることを目指す学習の場合の学習問題（学習課題）の型

「…をつくろう。」型

C 低学年児童等に学習意欲を高めようとする場合の学習問題（学習課題）の型

「…のわけをさがそう。」型

「…のひみつをみつけよう。」型

D 実際に観察や実験で、仮説を検証する場合の学習問題（学習課題）の型

「…を通して…を確かめてみよう。」型

E 一人一人の児童生徒に意志決定を迫

る場合の学習問題（学習課題）の型

「…をどう考えるか。」型

いずれの場合も、まず、授業者は児童生徒の先行経験や当面している事象に基づいて、前述の条件を満たした学習問題（学習課題）となるように創意工夫をすることが大切である。

(2) 学習指導過程

A～E等の学習問題（学習課題）が決定したら、次に取り組むことは、その問題（課題）をどのような指導過程（児童生徒にとっては「学習過程」となる）で授業を展開するかを考えることになる。

指導過程〈導入・展開・まとめ〉でのポイントは以下のとおりである。

| | |
|-------------|---|
| 導 入 | <p>《見いだす》段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの経験や既習事項から学習問題への興味・関心を引き起こし、自分なりの問題意識をもたせる。 ・ 学習のめあてと問題解決の手順、見通しをもたせる。 |
| 展 開 | <p>《自分で取り組む》段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒なりに予想し、思索を立てさせる。 ・ 体験的な学習を取り入れ、思索し調べ、検証する。この場合に机間指導等で個別指導を忘れないようにする。 <p>《広げ深める》段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小集団やより大きな集団で話し合うことでお互いの考え方を比較検討させる。 ・ 出された個別問題を一般化させる。 |
| ま と め | <p>《まとめあげる》段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒が展開の過程で学んだことをまとめ、整理させる。 ・ 類似問題を考え、応用したり発展的に考えたりする活動を予定する。本時の学習を振り返り、次時の予告をする。 |

(3) 診断と評価

児童生徒が今日の学習は「楽しかった」「よく分かった」と学ぶ喜びを感じる授業は、教師にとって一朝一夕にできるものではない。何回も授業実践を繰り返した「診断」と「評価」に基づく実践でなければならない。

「診断」は教育評価の重要な機能の一つである。これは一人一人の児童生徒の知識や技能、性格などの実状を分析し、その時間の教師の指導法を含め、どこに課題があるかを明らかにすることをいう。

「評価」は「診断」した結果をもとにして、今後の指導目標の設定や、学習指導の在り方を方向付けたり、学習過程を改善したりする活動をいう。

「評価」は次のような観点を立てて実施するとよい。

* 目標の設定

何を評価するのか、具体的に明確にする。

* 評価場面や方法の選択

評価項目に照らし合わせて、評価規準を設定し教育効果が上がったかどうかについて、どのような場面で、どの方法で評価したらよいのかを検討する。その場合、主な評価法は観察法、テストによる測定法、心理診断法、自己評価法、相互評価法、作品などによる評価、質問紙法、評定尺度法等があるが、それらの実施方法と併せて、それぞれの長所や限界も理解しておく必要がある。

* 評価資料の整理

収集した資料を分析したり、図表化したりして、考察しやすいように整理する。

* 評価結果の記録及び利用

評価結果を評価項目に照らして解釈したり、価値判断などをしたりして、指導と評価の一体化を図る。

(4) 指導の基礎技術

教師の指導技術にも基礎・基本がある。

これを理解、習得することも指導力の向上には必要不可欠である。

ア 発問

「発問」と「質問」とは似て非なる言葉である。「質問」は質問者が抱く不明なことを明らかにしようとする〈問いかけ〉であるのに対して、「発問」とは授業者が授業のねらいに向けて児童生徒の思考を組み立てていくための意図的、系統的な〈問いかけ〉である。したがって、次のようなことに注意が必要である。

(ア) 発問はあいまいな表現でなく、発問の趣旨が児童生徒に分かるようなものであること。例えば「どうして〇〇したのでしょうか？」という発問などは理由を聞いているようにも、方法を聞いているようにも、とられてしまう。

(イ) 発問は指導過程の中でタイミングや場面を考えてすること。また、次の発問への伏線であるべきで、教師の発問に答えることで、児童生徒たちの思考が深まり、拡大するものでなければならない。

(ウ) 児童生徒の興味・関心を喚起する一人一人に応じた発問であること。そのためには、指導案を考えるときに、指導者は十分に練った「発問」を用意しておかなければならない。授業を展開する場面でどうしても大切な「発問」（これを「基本発問」という）は、一単位時間で4～5回程度必要であるという意見もある。

(エ) 「発問」は口頭によるものだけではない。プリント、カード、板書、授業者のボディランゲージ等、その授業でどのような方法の「発問」が適切かを考えることも必要である。

イ 指名

「指名」は「発問」に対する児童生徒の反応をより効果的に引き出すための教師の意図的・計画的な行為である。生

年月日や出席番号をもとにするもの、児童生徒どうしが指名し合うものなどは一考を要する。

以下は指名における留意事項である。

(ア) 教師は、教材や児童生徒の長所、特性をあらかじめ把握しておき、意図的・計画的に指名すること。

挙手できない児童生徒が、挙手している児童生徒の陰で小さくならないように常に同一人、声の大きい児童生徒が優先的に指名されることのないように工夫すること。

(イ) 「指名」の際、意見を発表する児童生徒に対して、教師は丁寧に対応する。指名して意見を求めながら、教師が板書をしたり、教師用資料を見ていて、発表者の意見をよく聞かなかったりすることがないようにすること。

ウ 発表

児童生徒が学習に意欲的に参加して自己を高めていくためには、学習時間に多くの児童生徒の発表の場を確保しなければならない。

以下は発表方法の具体例である。教師は発表が得意でない児童生徒に対して事前指導の過程で積極的かつきめ細かな指導援助をすることが必要である。児童生徒は一つの発表で大きな自信をつけたり、また逆に、自信を喪失したりするものである。

*言葉による発表

- ・挙手や指名による発表
- ・音読や朗読による発表
- ・ノートに考えや感想を書いたの発表
- ・聞いたことや調べたこと等の個人及び班での発表

*展示や掲示による発表

- ・感想文、記録文、詩等の展示による発表
- ・個人新聞、班新聞、係活動等の新聞掲示による発表

*演技や演示による発表

- ・動作化、身体表現（演劇、合唱、合奏等）による発表
- ・実験の演示による発表
- ・コンピュータ等の機器による発表

エ 板書

児童生徒は、その時間の学習課題に対して板書されたことを見ることで、自分たちの思考の深化・拡大が確かなものになる。それだけに、教師は、創意工夫し、何を、いつ、黒板のどの位置に、どう書くかの「板書計画」を事前に立てて授業に臨む必要がある。

以下は板書に関する留意事項である。

(ア) 板書の位置は高さも考慮して、全児童生徒が見える位置にする。

(イ) 文字の大きさは、低学年は大きく、順次、学年相当の大きさにする。

(ウ) 児童生徒の発表した言葉をそのまま書くのではなく、整理して適切な文字にまとめる。

(エ) 文字や数字だけでなく、図表や絵と組み合わせた板書を工夫する。チョークは3～4色を用意して、色の区別と使い分けを決めておく。その際ユニバーサルデザインに配慮する。

(オ) 小黒板、カード等の教具や資料等を併用した板書を工夫する。

オ ノート指導

児童生徒の学習の足跡・道筋が具体的に残っているものがノートである。したがってノートにはその児童生徒がその時間に学習したこと、考えたこと、調べたこと、練習したことなどが記述されている。教師の板書したものを機械的に転写しただけでは、ノートが本来の役割を果たしているとはいえない。

以下は留意事項である。

(ア) そのノートが何のためのノートなのかを使用前に児童生徒にしっかり把握させる。（記録ノート、練習用ノート、感想文ノート、予習用ノート等）

- (イ) ノートの細かい使い方を最初に約束する。
- (ウ) 教科書ページの記入、年月日の記入、段落、句読点、小見出し、行や字数のそろえ方。
- (エ) 適宜ノートに目をとおし、助言や励ましを添える。上手なノートの使い方をしていく児童生徒を誉め、そのノートを紹介して他の児童生徒の参考にさせる。
- (オ) ノートづくりに必要な時間を学習時間内に確保し、児童生徒に安心感をもたせる。それは、板書事項の転写で学習を終わらせないためである。

カ 話し方・話術

教師も人間である。声の大きい人、声の小さい人、早口の人、ゆっくり話す人、高音で話す人、低音で話す人、「よ」「さ」「ね」などを語尾につけて話をする癖のある人など教師の話し方も様々である。話すときの表情もいつも硬い表情で話す人もいれば、笑顔で話す人もいる。ある程度の話し方や表情の違いは「個性」だが、それが程度を越え、教室でその教師の話を聞いて学習する児童生徒にとって障害になる場合もある。

以下は話し方・話術に関する留意事項である。

- (ア) 自分の話し方は、自分では分からない。同僚の教師に聞いてもらったり、自分で授業をビデオに収録したりするなど、自分が児童生徒になったつもりで表情や話し方をチェックすることが必要である。
- (イ) たとえ、話し方・話術が秀でていても、児童生徒に対して、感情に走ったり、人権的な配慮のない言葉を用いたりする教師は、児童生徒との信頼関係を築くことはできない。このことに十分に留意する必要がある。

キ 机間指導

授業中に、教師が学習している児童生徒のそばに行き指導をすることをいう。これは一人一人の児童生徒に対する指導であり、児童生徒の力を見だし、伸ばし、育てることをねらって行われるものである。ただ見て回るというのではない。机間指導での留意点は、次のとおりである。

- * 一定の方向、特定の個人やグループに偏った机間指導はしない。
- * 1時間に1回以上は机間指導をするように指導過程を工夫する。
- * 指導中に全体で考えるべき学習課題を見つけたら、机間指導終了後に、全体に投げかけをする。

《参考・引用文献》

- ・中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)平成28年12月
- ・小学校学習指導要領文部科学省平成29年3月
中学校学習指導要領文部科学省平成29年3月
- ・図書教材研究シリーズ13『授業と教材—教材の正しい理解と活用のために』財団法人教育研究所協会平成10年
- ・評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校・中学校)
- ・言語活動の充実に関する指導事例集(小学校版・中学校版)
- ・(指導資料111集)「小学校版学習指導改善の手引き」千葉県教育委員会平成6年
- ・(指導資料112集)「中学校版学習指導改善の手引き」千葉県教育委員会平成6年
- ・『健康的で快適な学校環境を目指して—学校環境衛生の基準の解説—』第一法規平成7年
- ・『一人一人を大切に—教育—障害等に配慮して—』文部省平成8年
- ・教育方法改善シリーズI『授業形態の改善』国立教育会館平成7年
- ・教育方法改善シリーズIII『授業設計と展開の改善』国立教育会館平成7年
- ・教育方法改善シリーズV『学習評価の改善』国立教育会館平成7年
- ・教育方法改善シリーズVI『学習環境の改善』国立教育会館平成7年

(5) 教室環境

児童生徒の生活の場であり学習の場である教室の環境は、学習を進めていく上で果たす役割は大変大きい。

教師は、良い教室環境で児童生徒が学習するために、教室の採光、照明、換気、温度、騒音、安全等に気を配る必要がある。また良い教室環境を維持するため関係職員と連携しながら率先して修理等を行うことも大切である。

具体的には次の諸点に留意する。

ア 教室環境の構成要素と整備のポイント

(ア) 採光や照明

*カーテン

- ・布地の傷みや汚れがないか。
- ・気象条件で開閉ができていないか。

*照明

- ・机上（床上 75 cm）で 300lx 以上あるかどうか。（500lx 以上が望ましい）

(イ) 換気

- ・窓側及び反対側（廊下）を開口するなど、換気がスムーズに行えているか。（特に、冬の暖房時）
- ・二酸化炭素は、1500ppm 以下であることが望ましい。

(ウ) 温度

- ・18℃以上 28℃以下が望ましい。
- ・夏季：気温摂氏 25℃～28℃を目安にする。
- ・冬季：気温摂氏 18℃～20℃を目安にする。湿度は 30%～80%が望ましい。（最も望ましい条件は 50%～60%）

(エ) 黒板

- ・光が反射しないように工夫する。
- ・黒板にはテープや画鋲を使用しない。
- ・給食配膳前に黒板の文字を消さない。
- ・給食時にはカーテンをかけるなどして、雰囲気を変えるのもよい。

イ 教室環境をつくる原則と条件

(ア) 児童生徒が教室環境づくりに参加している。

(イ) 教室に変化があり、常に新鮮である。

(ウ) 作品に寸評を付けるなど情動的である。

(エ) 立体構成などを工夫して動的である。

(オ) 環境づくりは見通しを持ち、継続性がある。

6 学習形態の工夫

（多く行われている三つの学習形態）

各教科等の指導に当たって、個々の児童生徒が学習内容を確実に身に付けることができるように、学校や児童生徒の実態に応じ、各種の学習形態（学習集団）を組織した、様々な指導の方法を工夫する必要がある。

(1) 一斉学習

教師が活動の中心となり、同一の学習目標や教材によって、児童生徒が同じ時間の枠内で同一速度で学習を進める形態である。

〈長所〉

- ・学級全員に共通に理解させたい内容を指導するとき効率的、効果的である。
- ・話し合い活動に便利で、他者の意見や考えを聞いたり、自らの意見や考えを発表したりすることで思考力や判断力を養うのに適している学習形態である。

〈短所〉

- ・教師中心で、児童生徒が受け身の授業になりがちである。
- ・学力差、児童生徒の特性等の個人差に対応し切れない。

(2) グループ別学習（小集団学習）

学級のメンバーを少人数のグループに分けて、グループ単位で学習する形態である。

〈長所〉

- ・小集団なので一斉学習では発言できない児童生徒も発言ができて、意見交換

が容易になる。

- ・小集団なので助け合いながらの活発な活動が可能で、学びの深まりが期待できる。

〈短所〉

- ・小集団であるだけに、ややもすると、一部の者だけが活動することになりかねない。

(3) 個別学習

児童生徒が、自分の学習課題や計画に応じて学習を進める学習形態で、自分の興味・関心や、学習進度に合わせて学習ができるという形態である。

〈長所〉

- ・つまずきのある児童生徒には丁寧な指導ができ、理解が早まれば発展的な課題が与えられるなど、個人差に対応できる。

〈短所〉

- ・教師は一人一人の児童生徒の実態把握や課題解決の過程で、十分な支援や指導、評価が必要である。十分な指導体制がとれないと個々の児童生徒の学習が停滞する心配がある。多様な考えを身に付けることが難しい。

今、三つの学習形態を挙げたが、これらを単一的、固定的に考えるべきではない。例えば、導入時には「一斉学習」でこれから取り組む学習内容の概要や進め方の確認をし、問題解決や探究活動場面では「グループ別学習」や「個別学習」を計画するなど、教師は指導の目標、内容、児童生徒の実態等を考え合わせながら、どのような学習形態がその時間に一番適切なのかを考えて指導計画を立案しなければならない。

7 個に応じた指導の充実

授業に臨む際、教師が考えなければならないのは、その時間、その学級で一番適切な学習形態は何かということだけではない。同じ「グル

ープ別学習」という学習形態でも、児童生徒を習熟度や興味・関心等に応じた学習課題別で分けるなど、様々な《指導方法の工夫》を取り入れることで異なる教育効果が生まれる。

特に、児童生徒に「基礎・基本の確実な習得」をさせることをねらうには、「個に応じた指導」という視点での工夫が一層要求される。

学習指導要領においても、次のように示されている。

「児童（生徒）が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童（生徒）や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童（生徒）の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。」

（小学校（中学校）第1章総則第4の1（4））

(1) 「個に応じた指導」を取り入れる前になすべきこと

一人一人の児童生徒の学習内容に対する興味・関心や先行経験・知識はもちろんのこと、特性は千差万別のはずである。

教師が「個に応じた指導」を取り入れる前になすべきことは、児童生徒の「特性」には、それぞれ次のような側面があることを十分理解して実態を把握することである。

ア 同じ条件で学習しても、理解度、習得量、理解するのに必要な時間等は一人一人異なる。

イ 児童生徒は異なる成育歴・生活環境をもつので、学習内容への興味・関心はそれぞれ異なる。

ウ 児童生徒には、言語や記号で論理的・抽象的に考えることが得意なタイプ、感覚的に思考するタイプ等があり、認識の仕方、行動の仕方、学習スタイルが異なる。

る。教師が一斉授業に固定することなく、個に応じた学習指導を充実するためには、児童生徒の様々な興味・関心、学習や認識の仕方に応じた教材を開発し、多様な児童生徒が意欲的に学習に参加できるように、単元構成を工夫した学習指導案で授業に臨むことである。

(2) 学習指導法の工夫

ア ティーム・ティーチング（複数指導）

児童生徒の興味・関心を生かしたり、学習の仕方の特性などに対応した指導をしたりするために、複数の教員で指導に当たることは有効である。これがティーム・ティーチング（TT）といわれる指導である。

イ 少人数指導

文部科学省の教員加配措置もあって、平成13年度頃から特に多くなった指導法で、学級を複数の集団に分けて指導する形態のことである。習熟度に差がつきやすいと思われる教科で実施される場合が多い。2学級を3集団に分けて3人の教員が指導するパターン等、様々である。

学習集団の編成方法としては、機械的に分割、習熟度別、興味・関心に応じた編成等が考えられる。

ウ 小学校における教科担任制指導

中学校では教科担任制が一般的だが、小学校でも高学年の算数、理科、外国語活動・外国語等の教科を中心に教科担任制指導を導入している学校がある。小学校高学年における教科担任制は、教師の専門性を生かした学力向上、複数の教員による児童の多面的理解、中学校への円滑な接続等の観点で注目されている。

《参考・引用文献》

- ・教育方法改善シリーズI『授業形態の改善』国立教育会館
平成7年
- ・教育方法改善シリーズIII『授業設計と展開の改善』国立教育
会館平成7年
- ・教育方法改善シリーズV『学習評価の改善』国立教育会館
平成7年